一般演題（ポスター発表）| 鎮痛・鎮静・せん妄 研究

[P53]一般演題・ポスター53
鎮痛・鎮静・せん妄 研究01

座長:神山 治郎(さいたま赤十字病院)

2019年3月2日(土) 11:00 ～ 11:50 ポスター会場12 (国立京都国際会館1F イベントホール)

[P53-5]心臓手術における術後長期 ICU滞在と Frailty(脆弱性)の関連性についての検討

吹田 真一, 吉谷 健司, 大西 佳彦, 久保 直子, 矢作 武蔵, 下川 亮, 月永 晶人 (国立循環器病研究センター 麻酔科)

背景：近年心臓手術において、患者の高齢化に伴い Frailty（脆弱性）を伴った患者も増加しており予後に影響すると報告されている（１）。また術後長期 ICU滞在は PISC（集中治療後症候群）の発症頻度を増やし、術後のQOLを低下させるだけでなく、長期予後に影響すると報告されている（2）。しかしながら、 Frailty患者と術後長期 ICU滞在との関連性は依然明らかではない。今回、我々は、 Frailtyを術前に評価し、術後長期 ICU滞在が96時間以上を超える場合との関連性を検討した。方法：対象は2017年7月から2018年2月の期間に、当院における成人の心臓手術および大血管手術の139例で術前に Frailtyを評価し、術後長期 ICU滞在との関連性を前方視的に検討した。 Frailtyの評価には Clinical Frailty Scale（ CFS：9点満点）(3)、 Cardiovascular Health Study（ CHS index）(4)を用いた。主要評価項目は ICU滞在時間、96時間以上で、説明変数は CFS4点以上、 CHS index3点以上とし、交絡因子を年齢（70歳以上）、性別、術後譫妄の有無（ ICDSCにて3点以上で譫妄と判断）、手術の種類、 EUROSCORE2、 STS score、 JapanSCOREとして多変量ロジスティック回帰分析を行った。結果：記録不備のものを除外し、対象人数は131人となった。96時間以上 ICUに滞在したのは38名であった。ロジスティック回帰分析の結果、 Frailtyと長期 ICU滞在は有意な関連性は認めず（ CFS: odds=1.20 95%CI 0.90-1.62 p=0.23,CFS4以上： odds=1.45 95%CI 0.67-3.15 p=0.34 CHSI3項目以上: odds=1.70 95%CI 0.45-6.42p=0.43）、 EuroSCORE2が術後長期 ICU滞在と有意な関連性を認めた（ odds=1.35 95%CI 1.01-1.80 p=0.04）結語：本研究において、 Frailtyと術後 ICU滞在日数に関連性は認められず、 Euroscore2と長期 ICU滞在の間に有意な関連性を認めた。

©一般社団法人 日本集中治療医学会